

学びの本質を追究する小学校家庭科の授業づくり

科学技術教育部 研究主事兼指導主事 栗山 真美子

要約

学習指導要領に即した「学びの本質」を追究し、質の高い学力を育む教科指導力の向上をねらいとする研修講座を実施した。具体的な実践から学ぶとともに、題材を構想し、授業を行い、実践を踏まえた検証を行った。教員が自分自身の授業を振り返り、改善点を見出した上で、家庭科の実践課題も踏まえ「生活をよりよくしようとする実践的な態度を育てる」家庭科の授業づくりを目指した。

キーワード：家庭科、質の高い学力、授業づくり、題材計画、OPP

1 はじめに

小学校家庭科の授業は5年生と6年生で履修する。5年生にもなると教科の好き嫌い、あるいは得意不得意ができあがりつつある時期かと思われるが、家庭科は5年生で新たにスタートすることもあり、児童は男女の別を問わず好きな教科である。特に食に関する内容の人気の高い。

その反面、児童の生活に関する経験不足は周知のことである。講座の中で、「6年生を担任しているが、母親が家で料理をしているところを一回も見ることがないという児童もいます。」という声も聞かれるくらい家庭生活の実態は我々の想像以上である。

そのような現状であるからこそ、学校教育の果たす役割、家庭科を学ぶ意味は大きいといえる。

しかし、家庭科の授業に関して校内研修会等で十分な研究は行われにくく、各校の研究の中心は学力向上の一つの指標とされる国語や算数などとなっている場合が多い。家庭科は5、6年生を担当した時しか教える機会がないため、研究成果を次に生かす機会が訪れるかどうか未知であることも家庭科の教材研究に十分な時間が費やされない理由の一つであろう。授業は教科書会社から出されている教師用指導書を参考に行われることが多く、題材のねらいを明確にしないまま何かを作ることが目的になってしまっているなどの授業も見られる。また、若い先生方を中心に実習の技能の低下も見られる。府小研家庭科部の支部においても熱心に研究がなされているが、毎年、メンバーの入れ替わりが激しいため、研究の成果が継承されにくく、地域の教科リーダーが育ちにくいという課題が見られる。そのためか、出前講座の要請は多い。(平成25年度 12件 のべ208名受講)

2 講座のねらい

本講座のコンセプトは次の2点である。

- ①学習指導要領に即した「学びの本質」を追究し、質の高い学力を育む教科指導力の向上を図る。
- ②講座の内容を踏まえた授業づくりを通して、校内研修の活性化を図る。

本講座は4回シリーズとし、各回のねらいと概要は次の通りである。

【シリーズⅠ】

実践上の課題を明らかにして授業改善を図るための方策を考える。

- ・ 講義「本質的な学びを追究する授業の在り方」京都大学 石井英真准教授
- ・ 講義「生活をよりよくしようとする実践的な態度を育てる授業づくりの在り方」
センター所員
- ・ 研究協議「実践の振り返りと課題解決に向けて」

【シリーズⅡ】

効果的な指導方法について学び、児童の学習過程を大切にした授業のグランドデザインについて考える。

- ・ 講演「子どもがつくる自律的な学習」奈良女子大学附属小学校 堀本三和子教諭
- ・ 実践発表「生活をよりよくしようとする実践的な態度を育てる授業づくりの在り方」
平成 23 年度小学校授業づくり講座家庭科シリーズ受講者
- ・ 研究協議「実践の振り返りと課題解決に向けて」

【シリーズⅢ】

シリーズ受講者が実践する題材について、シリーズ受講者同士で協議し、具体的な実践に向けて準備する。

講座Ⅰ・Ⅱを踏まえ、シリーズ受講者それぞれが作成した題材指導計画をもとに研究協議を行った。指導計画を改善するとともに、よりよい実践に向けての学習活動の工夫について検討し、2学期の具体的な実践に向けて準備を行った。また、児童自ら概念の変容に気づき、学び手として育つ手立てであるOPPシート（One Page Portfolio）（堀，2013）の活用による題材構想の在り方についてセンター所員から講義を行った。

【シリーズⅣ】

受講者が2学期に実践した授業の報告から、授業づくりの考え方や教科指導の方法を検証し、今後の授業づくりに生かす。

- ・ 実践発表「生活をよりよくしようとする実践的な態度を育てる授業づくりの在り方」
平成 25 年度小学校授業づくり講座家庭科シリーズ受講者
- ・ 研究協議「生活をよりよくしようとする実践的な態度を育てる授業づくりの在り方」
- ・ 講義「これからの授業づくりと教科リーダーとしての在り方」センター所員

これらの4回シリーズの講座に加え、今年度新しい試みとして、受講者が講座の内容を踏まえた実践をする際に受講者同士が相互に授業を参観し、交流することができるようにした。一人2回までセンター旅費で出張できることとしたが、中には全ての授業を参観した受講者もあった。

また、シリーズ全体を通して、小学校家庭科における次の6つの実践課題に取り組む授業づくりを心がけた。

- ① 2年間を見通したストーリー性のある指導計画の作成
- ② 基礎的・基本的な知識及び技能の明確化
- ③ 問題解決的な学習
- ④ 言語活動の充実
- ⑤ 指導と評価の計画
- ⑥ 家庭や地域との連携

3 講座の成果

本講座では、最初に「本質的な学びを追究する授業の在り方」について学んだ。次に3年目を迎える学習指導要領を理解し、趣旨を生かしねらいを明確にした授業づくりを目指した。また、「評価規準の作成、評価方法等の工夫改善のための参考資料【小学校家庭科】」（文部科学省国立教育政策研究所）を活用するとともに、先に示した小学校家庭科の6つの実践課題に取り組む授業づくりを行うこととした。

5人のシリーズ受講者の実践から、講座の成果は次の通りである。

(1) ストーリー性のある題材計画をつくる

ストーリー性のある指導計画、題材計画を作成し、授業を進めることが大切であるが、教科書の順番に一つ一つ題材をすすめていくという授業のスタイルから抜け出せていない現状が見られる。しかし、2年間あるいは題材全体を見通すことで基礎的・基本的なものから応用・発展へと段階的に学ぶことができるとともに、家庭科の4つの内容を関連づけることで限られた時間を効率的に使うことができるという認識をもつことができた。

校内で育てたじゃがいもを題材にした事例では、じゃがいもが色々な料理に変身をする内容の絵本を導入に用い、関心・意欲を喚起した。基礎・基本、そして、それらを生かした創意工夫と、2回の調理実習を通して学ぶストーリー性のある題材計画の実践が見られた。授業の中で児童が失敗したことも次の授業に生かすことで成功につながり、実習を2回行うことで知識や技能の定着も見られた。ストーリー性のある指導計画をつくることは、工夫すればつながりのある効果的で楽しい授業がつかれるということを示すことができた。

(2) 基礎的・基本的な知識及び技能の定着を図る

小学校学習指導要領解説家庭編において、基礎的・基本的な知識及び技能とは、中学校段階への系統性、一貫性を考慮した上で、日常生活に必要なもの、応用・発展できるもの、生活における工夫・創造につながるものとしている。

それを考えるためには、まず、自校の児童の現状を把握し、どのような力を付ける必要があるのか学習指導要領を確認しながら「めざす姿」を明確にする必要がある。その上で、基礎的・基本的な知識及び技能の定着に有効な様々な指導方法について研究を行った。

以下に具体的な指導事例を紹介してみたい。

- ア 調理実習における基礎的・基本的な内容を学ぶための効果的な提示教材の開発
実習の前後も含めて使用した実践では、実習後の公開授業の様子からも内容が定着

している様子は明らかであった。同様の提示教材を別の受講者も授業に取り入れ、大変効果的であったと報告された。その後、府小研の支部に広まり、支部内の小学校でも活用されている。

イ 調理実習で用いる「切り方実物大カード見本」の作成

「評価規準の作成、評価方法等の工夫改善のための参考資料」を参考にして作成したカードの利用により野菜を適正な大きさに切ることができるとともに、児童同士の相互評価をスムーズに行うことができた。

ウ 各自が作った「野菜炒め」を写真に残し、ワークシートに貼る工夫

写真をワークシートに貼ることにより、後日のまとめの際に実習の内容を思い出すことができ、しっかりと振り返ることができた。

エ 1回目の調理実習の成果を2回目の調理実習に生かす板書の工夫

1回目の調理実習後のまとめの際に成果と課題をそれぞれチョークの色を変えて黒板に書いた。このことにより、2回目の創意工夫を生かす調理実習で取り組むべき課題が視覚的に明確となった。このときの板書は記録に残しておいた。2回目の調理実習後のまとめでは、1回目の実習後に課題と挙げていたことの達成具合を確認するかたちで進められた。

このように、児童が取り組むべき内容が明確になる授業づくりの工夫をしたことにより、従来の授業に比べて知識及び技能の定着が見られた。

基礎的・基本的な知識及び技能の定着を図るためには、教師が学習指導要領を十分理解し、目標を具現化することが不可欠である。

受講者の一人が、「家庭科を教えるのは3回目です。これまでご飯を炊く授業を2回しましたが、2回ともうまく炊けませんでした。ところが、今回、講座を受講して初めてご飯がうまく炊ける授業ができました。」と話していた。このエピソードの興味深い点は、講座の中で米飯の調理実習をしたわけではないということである。講座では学習指導要領に記載されている「米飯の調理」を事例として取り上げ、解説を行った。その際、そこに記述されている指導すべき基礎的・基本的な内容について十分な確認を行った。受講者が授業をする際には、学習指導要領の内容の理解に加えて、教科書の写真を十分に活用したり、児童の諸感覚を働かせて調理するよう指導したことも効果的であった。当たり前のことのようにあるが、学習指導要領をきちんと理解をすることでねらいを明確にしたよい授業ができるということを実感できた意味は大きい。

この他にも基礎的・基本的な知識及び技能の定着のための様々な方法を試みたが、その中で課題として挙げられたのは、知識の定着と技能の定着が一致しない場合があるということである。例えば実習ではできるが、テストができないという児童がいる。効果的な「振り返り」の工夫等、基礎的・基本的な知識及び技能の確実な定着に向けて、今後も継続して研究を続ける必要がある。

(3) 質の高い学力を育む

教育基本法・学校教育法の改正において、「基礎的・基本的な知識・技能の習得」「知識・技能を活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力」「学習意欲」

が、学力の重要な3つの要素として明確化された。京都府では、これらの要素を統合した学力を「質の高い学力」として捉えている。その中で、小学校家庭科の果たすべき役割やねらいについて総括して示したものが、次の教科の目標である。(以下、ゴシック体の部分は小学校学習指導要領解説家庭編 平成20年8月より引用)

衣食住などに関する実践的・体験的な活動を通して、日常生活に必要な基礎的・基本的な知識及び技能を身に付けるとともに、家庭生活を大切にすることを心がけ、家族の一員として生活をよりよくしようとする実践的な態度を育てる。

生活をよりよくしようと工夫する能力とは、すなわち、よりよい生活を目指して課題を解決する能力であり、家庭生活における身近な課題を様々な角度から考える思考力、考えたことを基に課題の解決を図るための判断力、自らの考えを的確に表す表現力などを含む。

本講座では「生活をよりよくしようとする実践的な態度を育てる」家庭科の授業づくりを目指し、家庭科の学習指導要領を理解することから始めた。その上で教科指導のポイントについて研究を深めたことにより、どの受講者も題材構成を考える時には常に学習指導要領に立ち返っていくことの必要性を再認識することができた。

半年近くをかけて受講者各自が題材計画を作り上げ、授業を行ったが、この間の準備は受講者がこれまでに経験したことがないくらいに丁寧で計画的なものとなった。

以下に具体的な指導事例を紹介してみたい。

ア 「みそ汁の調理」では、4種類のだしとだしを入れずに作った合計5種類のみそ汁を飲み比べたり、だしをとる前後の煮干しを味合わせて、だしの役割に気付かせる授業を行った。児童は非常に興味・関心を持ち、分かりやすく心に残る授業であった。授業後も子ども達は継続して「だし」に関心を示し、給食の献立についても、「このだしは何でとっているのだろうか。」などという会話を交わすようになった。

質の高い学力を育むことを目指す中で、実は授業前の受講者は、だしの違いが児童に理解できるのだろうか、難しすぎるのではないかという思いももっていた。しかし、実際の授業では児童は予想をはるかに越える力を発揮し、すべての味を当てることができた。その結果、子ども達は教師が思っている以上に力があることに気付くことができ、ここまでのことができるのならもっと色々なことに挑戦させる授業をつくりたいという意欲をもつことができ、さらなる授業の質の向上につながっている。児童が教師の予想以上の力やたくましさがあったということには参観に来られた管理職の先生も感心されていた。

イ ジャーマンポテトを題材に2回調理実習を行った事例では、技能向上の成果があったことはもちろん、児童の変容が見られた。1回目は基礎的・基本的な内容を学習し、2回目には、それまでに学んだ基礎的・基本的な内容を活かして創意工夫を取り入れた実習とした。

1回目のじゃがいもの皮をむく作業では、「無理」、「いやや」などの声上がり、指を少し切ってしまった児童も2名あった。ところが2回目になると、私語も全くな

く黙々と取り組むことができた。皮が薄くむけるようになり、廃棄率は激減し、ケガをする児童もなかった。ケガがなくなったことについては経験回数の増加に加えて、むき方のポイントを再確認したこともよかった。調理時間も短縮された。1回目は、2時間連続の授業時間をややオーバーしてしまっていたが、2回目は片付けも含めて2時間以内で完了した。このような2回の調理実習を通して、児童は自分たち自身の成長を実感することができた。

ウ OPPシートを活用した授業実践も行われた。今回、OPPシートを活用した主な成果は次の2点である。

1つ目は、教師自身が自分の授業のできばえを実感したことである。複数の学級の授業を担当しており、それぞれの学級でOPPシートを使用したことにより、自分自身の授業の善し悪しをストレートに受け止めることができた。その結果をその後の授業改善に生かすことができ、指導力の向上につながった。

2つ目の成果はOPPシートの記述から、児童が授業を通して考えたことや授業前後の児童の変容がよくわかったことである。

題材「元気な毎日と食べ物」で用いられたOPPシート（下記）では、授業前と授業後に児童に「理想の朝ごはん」を書かせた。授業前にA児は「チャーハンのみ」、B児は「マスカット、プリン、りんごジュース」と書いているが、「食品の3つのグループ分け」「五大栄養素」「理想の朝ごはん」「伝統的な食事」「米飯及びみそ汁の調理」について学んだ授業後には、A児は、「チャーハン（ねぎ、たまご、ウィンナーソーセージ、ごはん）、スープ（とうふ、わかめ、ほうれん草）」、B児は「パン、チーズ、コーンスープ、マスカット、りんごジュース」とどちらも3つのグループの食品の組み合わせた「理想の朝ごはん」を考えている。また、「好きなものだけでなく、体のことも考えてごはんを作りたい。」「今まで3色の食べ物（食品の3つのグループ分け）のことなんか考えてなかったけど、勉強をしてから3色全部を食べようと思いました。」という記述も見られた。

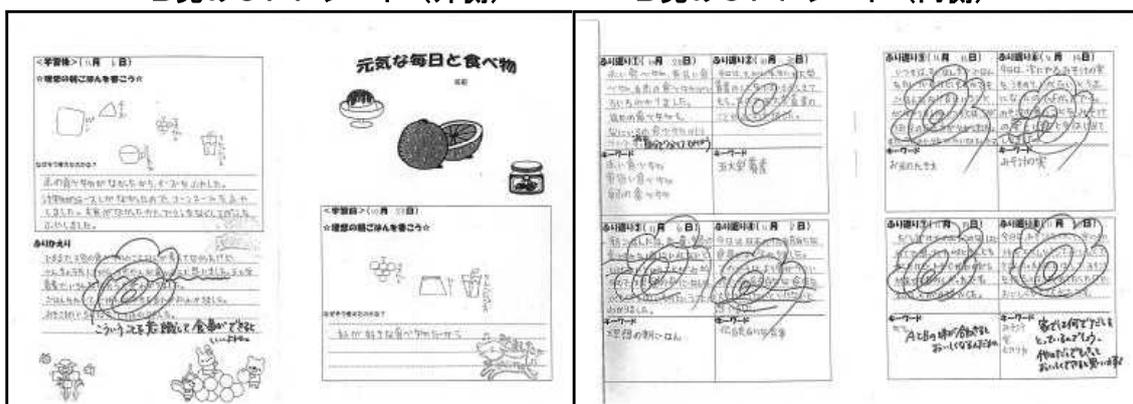
A児のOPPシート（外側）

A児のOPPシート（内側）



B児のOPPシート（外側）

B児のOPPシート（内側）



実践発表を聞いた受講者からは、授業の前後で児童がこんなにも変わるのだという感想や児童の変容の結果が出るのがよい、是非活用したいという声が聞かれた。

OPPシートは学習履歴に表れた記述内容を通して、児童の学習評価および教師の授業評価に役立て、教師自身の授業改善にもつなげることができる。今後も講座などを通して広めていきたい。

エ 実践された題材は「B 日常の食事と調理の基礎」が多かったため、栄養教諭とのTTの授業も行った。平素から家庭科の授業が栄養教諭とTTで行うことは多いが、「栄養教諭の専門性が出すぎる。」、「家庭科のねらいから外れてしまう。」などの課題も見られる。今回はその点に留意し、学習内容について栄養教諭と十分協議することで教師自身が内容について深く掘り下げることができ、効果的な実践を行うことができた。また、実技の技能(だしの取り方など)についても教師が栄養教諭から学び、教材研究をし、授業に生かすことができた。

オ 言語活動の充実を図ることができた。話し合い活動や自分の意見の発表がなかなかうまくいかない学級の実態がある中、実習など児童が楽しく主体的に取り組める実践的・体験的な活動を取り入れた。その結果、思考・判断を個人やグループでしっかりと行うことができるようになり、言語活動の充実につながった。

(4) 指導と評価の計画

講座での授業づくりを通して評価方法の計画・工夫について学び、深めることができた。特に、具体的な方法が分からないという声が多い調理実習の評価について、相互評価の具体的な観点を作り、実践できたことは大きな成果である。また、その際に、「評価規準の作成、評価方法の工夫改善のための参考資料」を大いに活用できたこともよかった。この資料は内容が大変具体的で役立つものであるにもかかわらず、余り活用されていないため、講座を中心に活用を勧めているところである。児童同士で相互評価させることにより、基礎的・基本的な知識及び技能が定着した、後片付けまでしっかりするようになった、実習中に遊んでしまう児童がいなくなった、相手を評価するためには自分自身が分かっているとい評価できないことを児童自身が認識したことで定着につながるなど様々な効果が見ら

れた。



じゃがいもの皮むきを相互評価する様子

また、評価について学ぶことにより、指導と評価の一体化を念頭にワークシートの作成を行うようになり、何を書かせるのかを明確にした質の高いワークシートを作ることができるようになった。

つくろうじゃがいも料理 名前 ()
 ~じゃがいもってすごい!!~

1. 知っているじゃがいも料理を書いてみよう。

2. じゃがいもについて調べてみよう。
 (良いところ) (気をつけること)

3. いろいろな調理法

ジャーマンポテトを作ろう①
 名前 ()

初めてじゃがいもの皮のむき方を確認し、ジャーマンポテトを作ってみよう。

○ジャーマンポテトの調理計画○

料理名	材料の量 (1人分の目安)	
	材料	分量
油		
塩		
胡椒		
マヨネーズ		
ケチャップ		
しょうゆ		
しょうが		
その他		

調理器具

ジャーマンポテトを作ろう②
 () ^ () より

1. 友だちの調理の様子を撮影し、気づいたことをまとめてみよう。

観察すること	ポイント	気づいたこと 友だちのよきも気づけよう
①じゃがいもの準備	・ 皮をじゃがいもの皮に 貼っているか。 ・ 皮をとっているか。 ・ 切ったじゃがいもを皮に つけているか。	
②材料の盛り方	・ 正しい盛り方 ・ じゃがいも （いちょう型切） ・ たまねぎ（うす切り） ・ パーコン （ほどよくまき） ・ 味のそびに気を付けてい ないか。	
③いため方	・ フライパンの熱を控えて いるか。 ・ パーコンをまねまねじゃ がいもの皮でいためるか。	
④盛り付けの仕方	・ ごみをとっているか。 ・ 手を洗ってばい菌をして いないか。 ・ もとの場所に戻しているか。	

ジャーマンポテト
 を作ろう
 まとめ③

年組
 名前
 ()

写真

④ ジャーマンポテト作りでできたこと・できなかったこと。

①じゃがいもの準備：綺麗に切った。	②いめる。
③盛りつける。	④盛りつける。
⑤盛り付けます。	

オリジナルジャーマンポテトを作ろう④

名前： _____

ねあて：ジャーマンポテト作りの学習を主として、オリジナルジャーマンポテトを作ってみよう。

○オリジナルジャーマンポテトの調理計画○

調理名	材料・分量	
	（1人分の分量）	
盛り付け図	材料	分量
調理用具	工賃したこと	
	その他の理由	

オリジナルジャーマンポテトの自分の目標

オリジナルジャーマンポテトを作ろう⑤

名前： _____

チェック	内容	学習	工賃したこと
	ジャガイモの準備 材料を洗って乾かす。		



ワークシートの工夫例

(5) 家庭や地域との連携

家庭や地域との連携も家庭科の実践課題の一つである。これについても様々な取組がなされた。

家庭科の授業について学級通信に記事を書ける取組を複数の受講者が行った。授業の内容を「お便り」を通じて家庭に伝えることで、事前に家庭でじゃがいもの皮むきをしてもらうなど児童の関心・意欲が高まり、目的意識を持って授業に取り組むなどの効果が見られた。

「チャレンジカード」を作成し、学習したことを自主的に家庭で実践できる工夫を行うことで児童が意欲的に家庭での実践に取り組み、技能の定着につながった。

受講者からは、次のようなエピソードも聞かれた。調理実習でジャーマンポテトを作った後のことである。母親が、「今日、夜ご飯が一品足りひんわ。どうしよう・・・。」と言うと、男児が、「俺、ジャーマンポテトやったら作れるし、作ろうか？」と家にあった材料で作って、その日の夕食のおかずの一品となったということであった。

基礎的・基本的な知識や技能の定着は家庭科における重要な課題であるが、限られた授業時間の中ではなかなか困難であり、家庭と連携し、家庭でも実践の機会を設けることが必要である。無理なく家庭でも実践できる方法について今後も研究を続けていきたい。

学校給食との連携も行われた。実践した学校では月に1回、カレーの日がある。調理実習で身に付けた技能の確認と向上のために児童が給食に使うじゃがいもをむいた。この作業を通して児童は調理員の仕事の大切さを理解できたとともに、全校のために役立つことができたという達成感をもたせることができた。

授業づくり講座を受ける前の受講者は、児童が学んだことを家庭で生かせる題材計画を作成していなかったが、受講する中で、児童に実践的・体験的な学習をたくさん行い、家庭での実践につなげる授業実践をすることが大切であると考えられるようになったのも大きな成果である。

今後は家庭だけでなく、地域とのつながりを重視した家庭科の授業づくりの研究も進めたい。

(6) 他教科との関連

家庭科と他教科との関連について、シリーズ受講者の内1名が家庭科と関連した道徳の授業研究を行った。「おばあちゃんのお手玉」(東京書籍「みんなたのしく」)を用いて、直せなくなってしまったもの(主人公のワンピース)を他のもの(お手玉)として再利用することの良さを感じ、ものを最後まで大切に使うとする心情を育てることをねらいとした。ものを最後まで使うことの大切さや、使い方を工夫することで長く使えることを理解するとともに環境についても考え、衣類などをリメイクするための裁縫の技能習得に関心・意欲が高まるなど家庭科の流れに自然につながる優れた実践であった。授業を通して「ものが壊れても直して使いたい。」という気持ちが芽生えたり、「古新聞でエコバッグを作ろう。」という行動につながるなど児童の意識の変化や再利用への関心・意欲も見られた。この授業実践を行った受講者は、この児童が数年後家庭科を学ぶとき、この授業のことが心のどこかに残っているだろうという手応えを感じている。

「家庭科は高学年で学ぶ教科であるが、全学年で家庭科教育につながる授業ができることを理解できた。」「児童の生活に密接に関わる教科なので、今後も関心を深め研究していきたい。」などの感想が聞かれたことも講座の成果の一つである。

(7) 教科リーダーの育成

本講座では、講座での学びを他の教員へ波及させるために、校内研修の中核となる人材育成、教科リーダーの育成を視野に入れている。いくつかの学校では講座内容を踏まえた出前講座の依頼があり、校内研修の支援を行うことができた。

また、受講後、シリーズ受講者が府小研支部の研修会で実践発表を行い、研修の成果と優れた授業実践の波及に努めた。過年度シリーズ受講者は府小研家庭科部の専門研究員として家庭科の研究を続けており、7月の府小研支部長会で実践発表が行われた。その内容は学習指導要領の趣旨やセンターの方向性を具現化したもので、支部長の先生方からも「専門研究員、センター所員双方の内容が合致しており、具体的によく分かった。」と大変好評であった。

(8) 今後に向けて

本講座においては、これまでに述べたように多くの成果と受講者の指導力の向上が見られたが、次のような実践課題がある。

ア ストーリー性のある指導計画の作成はできたが、2年間を見通したストーリー性のある指導計画にまでは至っていない。効果的な指導方法を見出すことはできたが、全てにおいてそのようにしていると時間が足りないという声もある。児童に付けたい力、目指す姿を明確にし、題材をよく吟味し、精選する必要がある。それぞれの学校の実態にあった指導計画の作成に向けて、さらに研究を進める。

イ 実践的・体験的な学習を取り入れた授業実践がなされた反面、「技能は身に付いたが、知識が身に付かない。」「具体的には実習ができたが、テストができない。」と

いう場合もあった。うまくいかなかった部分について、本講座の中での検証は不十分であった。基礎的・基本的な知識及び技能が確実に身に付く指導内容の工夫について今後も研究を進める。

ウ 本講座で受講者が扱った内容が「B 日常の食事と調理の基礎」に片寄ってしまったので、今後は他の内容についても問題解決的な学習を中心とした授業づくりを進めていく必要がある。

エ 学習指導案や題材計画、ワークシートなどの教材等を広く共有財産として活用できるような方策を探る。

4 教師力向上への展望

本講座では、長期にわたりともに研究を行ったシリーズ受講者が互いの授業実践を見聞きすることで学びを深めることができた。

講座を通して学んだことは、家庭科だけにとどまらず、他教科でも通じる部分が多いため、これからの授業づくりに色々な点で生かすことができるという認識を受講者が共有でき、今後の授業実践の視野を広げるものとなった。時間をかけて丁寧に練り上げた質の高い授業を実践し、教科指導力の向上を図れたことが受講者の自信となっている。今後、教科リーダーとして校内や地域での活躍を期待したい。

5 まとめ

家庭科は実践的・体験的な活動を通して具体的な学習を展開する教科である。その中でより確実に知識及び技能を身に付けるとともに、知識や技能を活用して、身近な生活の課題を解決したり、家庭での実践を無理なく行ったりすることができるようにすることを目指していきたい。

「教師は授業で勝負」と言われる。よい授業ができ、その授業に児童がついてきて、その授業を通して児童が変わる（変容を見せる）ことは教師にとって一番の喜びである。本講座を通して、シリーズ受講者の先生方にはそのような本質的な学びを追究する授業づくりをしていただくことができた。初めて挑戦されることも多く、うまくできるだろうかという思いもあったと思われるが、確かな足取りで見事な実践をしていただいた。その成果を支えたものとして、先生方の学級経営のうまさがあると感じる。よい授業を作るためには、日々、教材研究を続けていくことが大切であるのはもちろんのことであるが、言語活動を中心とした双方向の授業づくりが求められる今、加えて、学級経営などに不可欠なコミュニケーション能力、コーディネート力も身に付ける必要がある。日々の授業での言語活動の質的向上を図るため、授業形態の具体的な技法などについて更に学ぶ必要も感じている。また、家庭科においては効果的な実習題材の開発も重要である。今後の研究課題に加えることで、授業づくり講座の質を更に高めていきたい。

参考・引用文献

文部科学省(2009) 学習指導要領解説 家庭編, 大日本図書

国立教育政策研究所(2011) 評価規準の作成、評価方法等の工夫改善のための参考資料【小学校 家庭】

京都府教育委員会(平成 23 年 3 月) 京都府教育振興プランーつながり、創る、京の智慧
—

堀 哲夫(2013) 教育評価の本質を問う一枚ポートフォリオ評価OPPA, 東洋館出版社

福本浩介・栗山真美子・東山憲行(2012) 学びの本質を追究する「小学校『授業づくり』
講座」, 京都府総合教育センター紀要 pp41-51